

日中甘藷文化交流の掛け橋

沖縄『100号』（続）

川越いも友の会理事

井 上 浩

7. 穴澤家所蔵の中国関係資料

穴澤松五郎の生家は、海上町見広にある。カヤブキの大きな農家で、遠く銚子まで続く高台上にある。

この台地は、昔は雑木で覆われていた。それを土地の人が開墾しては、ムギとサツマイモの畑に変えてきた所で、松五郎の活動の本拠も、ここにあった。

松五郎の遺品は、孫の穴澤治子さんによって、大切に守られていた。わたしが同家を訪ねると、半日近くも潰してそのすべてを見せてくれた。

その中に、松五郎の中国でのサツマイモ関係の活動を裏付けられる資料が、2点あった。

まずは掛額。大きなもので、畳1枚を横にした感じ。

「棠蔭難忘 化雨時施」、「精誠教導」と毛筆で大書き、「青島特別市農事訓練所」とある。

そして李稚橋以下21名の中国人が、やはり毛筆で署名している。

青島で松五郎から直接、穴澤式甘藷栽培法を伝授された中国の青年たちが、感謝の気持ちから贈ったものだ。ただ残念ながら、年月日がどこにもない。

次は北支交通団からの感謝状。幸い、こっちは年月日がちゃんとある。既述のように、松五郎が中国（青島）へ初めて渡ったのは、昭和15年のことだった。その後、中国へ何回渡ったかは、分らないが、少くとも昭和19年と20年の2回、華北へ渡っていたことが分

かる。

感謝状

嘱託 穴澤松五郎

昭和十九年三月本団ノ招聘ニ応ヘ敢テ老軀ヲ顧ルコトナク卒先ソノ門下生二十余名ト共ニ本団ノ担当セル華北ノ日本甘藷増産ノ指導ニ挺身精励シ更ニ昭和二十年度華北ノ日本甘藷急増産ニ協力シ以テ画期的の大事業ノ完遂ニ絶大ナル貢献ヲ致セリ

仍テ茲ニ金一封ヲ授与シソノ功績ヲ賞シ功ヲ謝ス

昭和二十年七月一日

北支交通団

長官 宇佐美寛爾

松五郎は苗床指導を頼まれると、その家に泊り込み、苗床の作り方から始めて、それを使っての育苗、そしてできた苗を畑に挿すまでを、通して伝授したので、最低2カ月はかった。

彼は日本でのこの方法を、中国でも採ったらしい。つまり春の2～3カ月、中国に滞在し、苗挿しが終るのを見届けて帰国するというやり方だ。

それにしても興味深いのは、日本軍支配下の華北の鉄道管理機関である北支交通団が、サツマイモの増産事業に力を入れていたことだ。

その理由は、既述の嶋田勇氏の話の中にあっ

た。抗日ゲリラの鉄道襲撃を防ぐには、線路の両側まで、背の高くなるコウリャン畑では困るのだ。

といって、そんなことは占領地で、口に出せることではない。できることといえば、コウリャンをサツマイモに切り換えれば、より金になる。だから転作しようという呼び掛けぐらいであろう。

それも本当に儲かるのでなければ、中国の農民がついてくるはずがない。そこですばらしい増収技術を持っている穴澤松五郎を囑託とし、中国に呼んだに違いない。

しかも彼1人でなく、大勢の門弟を連れて来させているのは、中国があまりにも広大な国で、1人や2人の力では、どうにもならなかったからであろう。

なお松五郎は、太平洋戦争が終る直前の昭和20年7月10日に亡くなっている。この感謝状をもらって9日後だ。

享年66歳。戒名は、大誓院甘藷慈教居士。

8. 沖縄100号はなぜ中国で受けたのか

徐州甘藷研究センターの盛家廉先生によると、沖縄100号の最大の魅力は、環境への適応力が大きく、どんな所ででもできたことだという。

それはコムギも、トウモロコシもできないやせ地でもできたし、黄河下流域の肥沃な畑でもよく取れた。

それとわたしが心配していた味の方の評判も、決して悪くなかった。

たとえば、盛先生も味はいいとされていたし、わたしたちの世話を付きっきりでしてくれた邢竹芳先生も、若い頃、ふかしたり、焼いたりしてよく食べたそうだが、うまいイモ

だったという。

ただ沖縄100号が、中国、とりわけ華北全土を覆うほどの受け方をしたわけが、今一つ、はっきりしなかった。

そこでこんどは前出の、小野田正利先生を訪ねた。千葉市にある県立図書館で、穴澤松五郎関係の資料を探した帰りで、突然だった幸いご在宅で、心よく、こんな話をして下さった。

「わたしが北京の農業研究所へ呼ばれて行ったのは、昭和19年の春だった。そこでは沖縄100号が中国でも、すばらしい働きをするに違いないことを、試験を通してすでに掴んでいた。

だからこそ、わたしに普及用の大量の種イモを至急送ってくれるように頼んだわけだ。

あれが中国で受けた理由は、いくつか考えられる。

中国の在来種は、つるが長くなるものが多く、チッソに敏感だった。そのためチッソが少しでも多いと、つるぼけした。

ところが沖縄100号なら、その心配がなかった。しかもどこに作っても、在来種よりはるかにたくさん取れた。中国に限らず、日本でだって、あれが出る前の品種の収量は、話にならないほど低かった。

それと華北での晩植えの問題。ここには春植えと夏植えがある。春植えは、まずオンドルの効く部屋の中で発芽させた種イモを、畑にそのまま植えるもの。苗床の延長のようなもので、夏植え用の苗を取るが目的だから、イモも取れるがたいしたことはない。

では本畑である夏植えはどうか。春植えのイモづるが伸び、苗が取れるのは5月下旬か

ら6月初旬にかけてだが、これではちょっと遅い。中国の在来種は、苗挿しの時期が遅れると、収量がガタ落ちするものが多かった。そのため夏植えは、春植えよりは取れたが、両者の差は大きくなかった。

ところが沖縄100号は違う。これは晩植えに強い。苗挿しの最適期から1か月ぐらいの遅れなら、収量にほとんど差が出ないほどだった。

春植えに頼りながらの夏植えという、効率の悪い作り方をしていた華北の農民にとって、これほどありがたく、頼母しい品種はなかったはずだ。

その沖縄100号も、黒斑病で消えちゃったんだって？

実は日本でも、昭和13～14年頃、黒斑病が発生して大問題になった。沖縄100号もそれだけでは特別弱かったから、あわてて防除の研究をやった。

最初はうまく行かなくて弱ったが、植物病理の研究者たちの協力を得て、昭和15年には対策のめどがついた。

黒斑病は熱に弱い。そこで種イモとしての機能を傷つけずに、イモの中の全病原菌を殺せる温度は何度かを、実験を通して探った。その結果、風呂桶でも使って、種イモを47℃～48℃の温湯に10数分漬けるだけで十分という、温湯消毒法を確立した。

こうして消毒した種イモを使うことにより、日本では黒斑病の心配がなくなった。

戦後、中国が黒斑病で苦しんでいたとは知らなかった。知っていたら、温湯消毒法を教えてあげたのになあ。だれにでもできる、かんたんな方法だったんだから」。

さすがは、サツマイモの育種の第1人者だった人だ、中国の沖縄100号で、なんとなくはつきりしなかったものを、見事に解明して下さった。

9. 上海の冷凍焼芋

上海市農業科学院園芸研究所を訪ねた時のこと、サツマイモの研究をしている助理研究員、鄭海柔先生が、上海ならではの面白い話をしてくださった。

「上海は中国で一番軽工業が発達している所なので、サツマイモの加工工場も多い。その中に、日本向けの加工品を作っている所もある。

数年前からのことだが、油で揚げたものや皮をむいてふかしたもの、あるいは焼芋にしたものなどを冷凍にして日本へ輸出している。

ただそれらが、日本でどのように流通しているのか、ぜひ知りたいが、こっちにはなんの情報も入ってこない」

さいきんの中国では、もうサツマイモをそのまま食べることはない。澱粉かアルコールの原料か、ブタの飼料である。

だが焼芋だけは例外で、とくに大都市での人気が高い。そして「北京553」のような焼芋専用種まで開発されている。

そこで鄭先生に、日本向けの焼芋の品種を尋ねると、なんと沖縄100号だという。

沖縄100号は、とっくに徐薯18に取って代われ、消滅したものとばかり思っていたのでびっくりした。

上海は江蘇省の南端にある。その江蘇省が北の山東省と接する省境地帯が沖縄100号の産地で、そこから上海へ運び込まれていると

いう。

郑先生によると、「中国は広い。沖縄100号を今でも作っている所は、まだまだある」とのことだった。

それに味の方もいいらしい。前出の小野田正利先生も、「サツマイモの味は品種より土質だ。中国大陆の夏は日本より高温になる上、土が乾燥している。それで沖縄100号も、日本で作るより澱粉が多くなり、味もよくなる。中国では沖縄100号は、なによりもまず食用イモだった」と言われていた。

それにしても日本人が忘れかけていた沖縄100号が、冷凍焼芋となって日本へ里帰りし

ていたとは、思いもよらないことだった。

中国から帰って間もなくのこと、読売新聞論説委員、秋岡伸彦氏から、中国旅行についての電話取材があった。

そこで沖縄100号のを中心に話すと、さすがはベテラン記者だ。「まさに回り回ってですね」と表現された。そして平成2年10月2日号の同紙「編集手帳」欄で、わたしたちの訪中の成果を取り上げ、そう書いて下さった。

それにしても中国から日本へ、沖縄100号が入っているとすれば、その流通経路と評判が気になってくる。ぜひ調べてみたい。

＜いも・つれづれ草＞

田舎娘の香り？

ジャガイモの花は意外と美しい。その花じゅうたんを遠くから眺めても、農業試験場などに足を運んで、バライティに富む花一つひとつを見てもよい。そしてその鑑賞時間としては、花の中央の黄緑色の先端（柱頭）に宝石のような粘液があって、花卉がしばまぬ午前中をおすすめしたい。

白花では、畑を遠くからみると、ソバ畑に似ているが、近づいてみると違いがわかる。蜜腺が無いため、ソバ畑で見られるような脈やかに飛び回るアブや蜂の来訪がなく、とても静かで、女性的（いや男性的？）である。

芋の香りには、はっきりした個性があり、産地にもよるが、「男爵薯」、「蝦夷錦」、「銀山紫」などが良いほうとして知られている。また「メークイン」や「エニワ」のような芋臭さの強いものがある。しかし、花の香りとなるとどうであろう。

北方産花香気成分の研究をやっておられ、知床に近い根釧農試庁舎裏の実の結ばぬ栗の花の採取に見えたことのある北海道女子短大の若山誠治教授（当時）から、ジャガイモの花の香りについて、問い合わせをもらい、その答えに窮したこともあった。ジャガイモの花の満開時に

は、茎葉の香りと共に淡い香りの存在を認める者があっても、それが何の香りに近いかと問かけると、説明できる人は稀である。名古屋大の故長沢 徹教授の表現を借りると、

「花の色香を忘れたかのような」となり、十勝で、白花を好んで花瓶に飾っていた画家で農民の坂本直行さんによると、

「香りは上品とも言えないが、田舎娘の感じがある」となる。

試してみませんか？

ジャガイモを使った占い、治療などを世界からひろってみました。貴方もやってみませんか！？

△ 来るべき年が幸福か否かを知るには、予言者の前にジャガイモの山を積んでおき、2個づつ対にして取っていき、端数が残らなければ良い年が来る（インカ時代）。

△ ポケットにジャガイモを入れて歩くとリュウマチにかからない（欧米）。

△ いぼやこぶを生ジャガイモでこするか、いもを土に埋めておくと治る（同）。

△ 新ジャガをポケットに入れておくと、お守りになる。黒ずみ、木片のように堅くなるまで入れておくと効果がある（英、米）。

— 浅間和夫 —